

NRI学生小論文コンテスト2021

論文審査会



論文審査会

審査委員が集って議論を交わし、
最終審査会に進む上位入賞論文を選びました



2021年11月18日、NRI東京本社の大会議室で論文審査会を実施しました。
昨年度の論文審査会は新型コロナウイルス感染対策のためにオンライン開催でしたが、今回は感染の波の合間であったことから、感染対策を講じた上でのリアル開催ができませんでした。審査委員7人が熱い議論を交わし、上位入賞論文9作品（大学生の部4、高校生の部5）を選定しました。各賞については、2021年12月20日の最終審査会におけるプレゼンテーション審査を経て、決定します。

〔論文審査会に至る経緯〕

- 一次審査：NRIグループ社員延べ104名が論文を評価し、評価の高かった18論文（大学生の部8、高校生の部10）が二次審査へ。
- 二次審査：審査委員長でNRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む7人の審査委員それぞれが18論文を評価・採点。

〔論文審査会 審査委員〕

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

齊藤 義明 NRI未来創発センター 2030年研究室長

八代 夕紀子 NRIプラットフォームサービス開発部 グループマネージャー

小松 康弘 NRIコーポレートコミュニケーション部長

本田 健司 NRIサステナビリティ推進室長



論文審査会レポート

2021年11月18日に、NRI東京本社の大会議室にて論文審査会が行われました。

集まった7人の審査委員による議論の一部をレポートします。

なお、性別・学校名・学年などの応募者情報は全て伏せられたうえで、議論は行われています。

大学生の部

真摯に、ていねいに、「安全安心な社会」を提示

〔論文審査会 対象論文〕 *文中での呼称

・ひよっこドクターのほけんしつ ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～ *「ひよっこドクター」

地域医療におけるかかりつけ医の不在、医学生が全人的に患者を診る視点の欠如、独居や老々介護による高齢者の孤独などの課題意識から、「誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できる」安全安心な社会を目指し、全国共用試験に合格したStudent Doctorの資格を持つ医学生による「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。

・新しい教育の形を世界へ *「International Teacher」

南アジアの教員志望の学生が、オンラインで日本の小中高生に自国の文化、歴史、宗教、政治などについて英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教師になる「International Teacher制度」を提案。

・セルフサービスフードバンク ～新しい食品リサイクルのかたち～ *「セルフサービスフードバンク」

まだ食べられるのに廃棄される食品への「もったいない」という思いを出発点に、廃棄されてしまう食品をリサイクルして食べ物に困っている人たちを支援する「セルフサービスフードバンク」を提案。

・留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり *「老舗旅館」

老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた、繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みづくりを提案。

1作品が群を抜いて高評価を集め、留学生の作品も高評価に

桑津——最も評価が高かった作品は「ひよっこドクター」で、群を抜いていますね。審査委員のみなさん、それぞれの作品へのご感想・ご意見をお願いします。

「ひよっこドクター」

——医師に必要な複眼的レンズを身につけるためのしくみが地域医療を支える

池上——医師不足を「全国共用試験」に合格した医学生を使ってカバーし、なおかつ医学生の視野を広げるという一石二鳥アイデアには感心しました。大学で医学部の学生に教える時、私は末期がんの患者への告知の実演などをしてもらっているのですが、医



審査委員長 桑津 浩太郎

学生には看取りや死についての教育が足りていません。医学生が忙しいことは承知していますが、高齢者や地域医療の実態を学ぶことはとても大事であると思い、高く評価しました。

最相——医師に必要な複眼的レンズを身につけるための試みが地域を支え、ひいては医療全体の底上げにもつながる、素晴らしい提案だと思いました。この筆者は新潟で住民と交流した中で地域医療の問題点を実感して、新潟での試みを意図していますが、全国的なスタンダードとなる可能性も感じられます。Student Doctor 制度は医療行為の枠組みが明確ではなく、患者の同意も得られにくいようですが、病院やクリニックではなく「ほけんしつ」という位置付けなら患者の理解も得やすいのではないのでしょうか。また、地域の高齢化にあって、おそらく彼らは人の死を目にするとと思いますが、若い医学生のうちに死へのプロセスを経験するということは、その後、医師として活躍するにおいて非常に重要な土台となるだろうと思いました。

桑津——今後も長期に続く地域医療という問題に対して、できること、すべきことをわかりやすく表現しています。今回の作品の中では、バランスといい、内容といい、リアリティといい、質的に頭1つ抜けていた印象です。

齊藤——病気や健康について相談したい地域の高齢者と、人間や社会に対する理解を深める必要のある医学生とを組み合わせた「ひよっこドクターのほけんしつ」というしくみに、安心社会へのビジョンと一定の現実的実現性を感じ、検討に値する提案だと評価しました。一方で、「医学部4～6年生は国家試験を控えて時間的余裕がないのではないか」「高齢者の日常的な相談を受けていて、医者として成長できるのだろうか」などの疑問も残りました。

小松——自らが主体となって臨む提案で、「倍率」という言葉を使って目線を表現し、自分の周りの事象に終始せずに論理を展開できています。文体も簡潔で、医療に詳しくない人が読んでも理解できる構成、内容、表現になっています。Student Doctor に負荷がかかる仕組みであることに対して実効性の観点で不安は残りましたが、彼らの資質や信条に鑑みるに、何ら支障はないかもしれないと思います。

八代——医学生が少しでも多くの臨床経験を積むことで日本の医療レベルが進展し、高齢社会が抱える問題が解消に向かうのであれば、素晴らしい仕組みだと思いました。医師の卵は多忙だと思いますが、その当事者からのアイデアで、自分が高齢者になった時は若い先生にお世話になりたいと思いました。今後さらに5Gやデジタル活用が進めば、オンライン診療の精度も上がって、実現に向けたハードルはもっと低くなると思います。

[International Teacher]

——南アジアと日本の双方にメリットがある、多様性を育む試み

池上——インターナショナルティーチャー制度は、ネットを使ったリモート授業が普通に行われるようになったコロナ禍だからこそ言うべきか、国境を越えて双方にメリットがある試みで、評価できると思います。日本の中学生・高校生が英語の授業が理解できるかなど、いろいろな課題は考えられますが、南アジアの学生が実際にオンラインで授



特別審査委員 池上 彰さん



特別審査委員 最相 葉月さん

「ひよっこドクター」 社内審査委員のコメント

- ・ 問題設定やその解決法に発想の豊かさがあり、読みながら「実際に実現されるといいな」と一番感じた小論文だった。
- ・ 実体験を基にした提案だったこともあり、解決策が非常に具体的だった。サステナブル社会の実現という観点でも、医療から社会全体の問題を解決するものであり、医療にとどまらない内容だった。
- ・ かかりつけ医がない／医者も少ないといった地方の外部課題、人と接する業種でありながら全人的な視点が欠如しがちという医者の卵の内部課題の解決案として、まさに安心安全なこれからの社会の形を示すいい提案だと思う。



審査委員 齊藤 義明

業をして、日本の子どもたちが授業を受けることによって、民族や宗教の違いなどの多様性を学べるのはとても大事な事なのではないかと思いました。

小松——海外とつないだオンライン授業というのは、似たような取り組みを見聞きした感もありますが、対象者や地域を具体化している点が良かったと思います。また、筆者はかなり内容を具体的にイメージして論文にまとめたのではないかと思われたことも、評価につながりました。コロナ禍でオンラインでのコミュニケーションが当たり前になるようになったことは、この取り組みの実現性を担保するとも思います。ただ、この取り組みの運営費を南アジア諸国の国費に委ねるという点については、サステナブルの観点でもう少し検討できたのではないかと思います。

「セルフサービスフードバンク」

——フードロスの現場をよく知从中から生まれた具体的アイデア

最相——外国人も多いコンビニ店員さんからの提案に、感動的な思いを持ちました。しかもアメリカの本格的なフードバンクの体験もしていて、現場をよく知在中で、まだ食べられるのに廃棄される食品に対して「もったいない」という思いがあり、そういう食品を食べるのに苦労している人たちの手元に何としても届けたいという思いから生まれた提案だと思います。コンビニの横など、人の目の届くところに設置して安全性に配慮すれば実現できそうです。食品を寄付したい人はたくさんいるのに、どこに持って行ったらいいのかわからなかったことを考えると、こういうフードバンクが近くにあれば、いつでも誰でも支援者になれると思いました。

本田——国内のフードロスは大きな問題で、特にコンビニでのフードロス問題は注目されています。実際にセルフサービスフードバンクが現実的かどうかは疑問が残りますが、国内でフードバンクの普及を妨げている理由を分析して対策を考えているところを評価したいと思いました。

「老舗旅館」

——インターンシップの経験から生まれた、地方の優良な観光資源の活性化策

最相——地方の優良な観光資源をいかに活性化させるかという提案で、アンケート調査や具体的な旅のスケジュールなどアイデアも満載で、興味深く読みました。テーマ設定や課題解決への流れも非常に論理的で明瞭でわかりやすく、論文として読みやすいと思います。コロナ禍で観光業界が大きなダメージを受けている中で、留学生からこのようなアイデアが出てきたことにも意味があると思いました。

桑津——論文のクオリティが、これまでの留学生の作品に比較して一段高かったと思います。老舗旅館とか体験型ツアーといった日本ならではのものにうまく着目していて、視点や提案に他を圧倒するほどの独自性はありますが、地に足のついた活動と分析力で、高く評価できると思いました。

八代——まず、留学生とは思えない日本語の文章力かつ完成度に、すごいと感心しました。顧客の年齢層の分布から30代子連れ家族客と70代友人旅行客に絞って対策を考えた点や、課題分析のくだり度で旅館の運営に対して「従業員の労働生産性が低い」と明

「International Teacher」

社内審査委員のコメント

- ・教育を題材に、日本における問題と南アジアにおける問題の双方を解決し、その結果多様性を育むという解決策は非常にユニークで、具体的であった。「こういうことが実現できたらいいな」という希望を抱かせる内容で、継続してこの問題に取り組むことは非常に有益であると感じた。
- ・教育実習のインターナショナル版としての枠組みは面白いと思う。日本の英語教育および現地の就業機会の醸成の観点で南アジアに絞った提案となっていたが、発展途上国の英語圏として拡大も期待できる提案だと思う。具体的な規模（人数）などの想定があると、より現実感が出てくると思う。

「セルフサービスフードバンク」

社内審査委員のコメント

- ・食料ロスについて考察ができており、助け合いが前提とされた案が展開されている。自分の実体験に基づいている部分が良かった。
- ・自身の体験に基づきつつ、大胆な発想で解決の切り口を検討しており、良かったと思う。



審査委員 小松 康弘

「老舗旅館」

社内審査委員のコメント

- ・地域社会の発展という観点で、独自の調査に基づく提案であり、実現させてほしいと感じた。

記した上で、「従業員を減らすよりも生産性を高めたほうが効果的だ」と主張する点など、ロジカルな展開で非常に読みやすく、説得力もあります。

留学生の2作品を含め、4作品が最終審査へ

桑津——最終審査会に進める論文をどうするかについて議論したいと思います。「ひよっこドクター」については、群を抜いて高い評価を集めているので、最終審査に進めることに異論はないかと思いますが、いかがでしょうか。

一同——賛成です。

桑津——最相さんと池上さん、お二人とも比較的高く評価されているのは、「セルフサービスフードバンク」ですね。

最相——池上さんがよろしければ、「セルフサービスフードバンク」は最終審査に進めてはいかがでしょうか。

池上——そうですね。リスク対策が課題だと思っていたのですが、コンビニの横において監視カメラを設置するなどの対策をすればリスク問題は解決すると思います。

桑津——では、「セルフサービスフードバンク」も最終審査に進めることとします。「老舗旅館」についても、留学生とは思えないほどの日本語の文章力と完成度で、「ひよっこドクター」に次いで高い評価を集めているので、同様に最終審査に進めても良いかと思いますが、いかがでしょうか。池上さんは、この作品はどのように思われましたか。

池上——経営の傾いた老舗旅館を次々に買収して経営を立て直している会社の手法と似ていると感じたのですが、その一方で、留学生が自分たちのインターンシップの実体験から編み出したアイデアであれば素晴らしいなと思いますので、最終審査に進めることに異論はありません。

最相——いつも評価の際の点数のつけ方に迷うのですが、総合点における1点、2点の差というのは、あまり大きな意味をなさないと思うのです。「International Teacher」は比較的高評価の方が多かったのですが、これも最終審査対象論文にしても良いのではないのでしょうか。

齊藤——私は、日本の子どもたちに南アジアの学生がオンライン授業をすると、先生になる資質がなぜ身に付くのか、日本の子どもたちが宗教や文化、歴史について英語で聞いて理解できるのかなど、実現性の面で引っかかりました。

小松——われわれの世代がこういうアイデアを聞くと「受け入れられない」と考えるものですが、子どもは思っている以上に順応性があって、すんなり受け入れるかもしれません。

最相——教科書に書いてあることではなくて、南アジアの人々がどういうことに苦勞しているとか、その国がどういう問題を抱えているかといったことを英語で聞くのは、とても良い教育になると思います。



審査委員 八代 夕紀子



審査委員 本田 健司



齊藤——そうですね。最相さんがおっしゃるように、確かに「International Teacher」は池上さん、最相さんをはじめ、比較的高い評価に固まっています。実現性の面は、授業のやり方を工夫して、言葉だけに頼らずに映像も使えば解決するかもしれません。

桑津——「International Teacher」も最終審査に進める方向で、みなさん納得していただいたという理解でよろしいでしょうか。

——一同——賛成。

桑津——それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「ひよっこドクター」「International Teacher」「セルフサービスフードバンク」「老舗旅館」の4作品といたします。各賞は、12月20日に行われる最終審査会でのプレゼンテーションで決定します。



高校生の部

やさしい心で、幅広い視点から想像力豊かに、 グローバルな社会課題を提示

〔論文審査会 対象論文〕 *文中での呼称

- ・～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～ **縫製工房 Clothes Mom** *「エシカルな縫製工場」

縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩壊事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指して、バングラデシュの女性たちによるエシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。

- ・日本を第二の故郷に ～未来の人材にクラウドファンディング～ *「SMILE FACTORY」

大切な故郷を捨てて難民となる人が世界に8千万人以上いるという現状に対して、日本としてできることはないかを考え、難民を未来の人材として見込んで企業から投資してもらうことで成り立つ難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。

- ・世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」—SRHRの実現へ— *「Soap-Loop」

諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張。若者が集まって性について自由に話せる場を作り、そこで作った石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の女性の健康を守るNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案。

- ・人間、う○ちくれるってよ **by 分解者** *「分解者を利用したトイレ」

世界で6億7300万人がトイレのない生活を送っている「屋外排泄」の問題に対して、分解者を糞尿処理に利用した、水も電力も不要な「Decomposer Toilet」を提案。

(注：分解者とは生態学用語で、生物の排出物や死がいなどの有機物を分解する細菌、菌類などをさす)

- ・自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ *「サポいる」

自然災害が後を絶たない日本において、次の世代へと住み続けられる街をつくるためには、被災地の円滑で持続的な復旧・復興支援が不可欠だという思いから、災害ボランティア支援アプリ「サポいる」(被災地をサポートし、皆をすまいるに)を提案。

上位2作品のほか、評価の拮抗する作品がそろそろ

桑津——評価の高かった作品は、「エシカルな縫製工場」「SMILE FACTORY」で、次いで「Soap-Loop」と「分解者を利用したトイレ」、続いて「サポいる」となっています。それぞれご意見をお願いします。



審査委員長 桑津 浩太郎

「エシカルな縫製工場」

—事業の方向性を自らデザインしようとするパワー

最相—グローバル化のしわ寄せがいった途上国の女性たちの現状を踏まえた企業は他にもありますが、この提案の豊かさというのは、働く人たちが単にその不公平な労働から救われるということだけではなくて、保育園を併設したり、リモートで働けるような仕組みを作ったり、エネルギー確保まで目配りしているところだと思います。何とかしてエシカルファッションを世界標準にしたいという志も強く感じられました。SDGs時代にあって、エシカルファッションのブランド価値はますます向上していくと思いますし、この筆者はきっと起業するのではないかというパワーを感じ、評価しました。

本田—グローバルなテーマである現代奴隷という問題を取り上げ、具体的な解決策を提示している点を評価しました。バングラデシュの事情もよく調べており、具体策にはリアリティが感じられました。遊具で発電させるというアイデアもユニークです。

齊藤—バングラデシュで展開しようとするエシカルトレードの事業内容はやや一般的ですが、自ら起業家のごとく主体的に会社や事業の方向性をデザインしようとする攻めの姿勢が、論文から溢れています。他の提案者に比べてこの点を圧倒的に強く感じ、高く評価したいと思いました。

八代—斬新さはありませんが、高校生の発想としては着眼点がユニークです。バングラデシュのビル崩落事故を受けて、彼女たちの苦痛をなくし、労働環境を徹底的に改善するのだという強い熱意も感じます。ロジックも文章も優れていて、読みやすい論文でした。最終段落にあった「私たち人間が作り出した衣服という素晴らしい文化が、今同じ人間を苦しめてしまっている。学校はそれを教えてくれない」という言葉が印象的でした。

「SMILE FACTORY」

—「共に生きる」視点で日本の難民受け入れの仕組みを提示

最相—おそらくアフガニスタンの難民のニュースを書くきっかけになったと思いますが、非常に短期間で考えて、調べて、集中して書いたのだらうと想像しました。難民という日本では扱いにくい社会問題を、「管理」ではなく「共に生きる」という視点から、すべての関係者にwin-winとなるシステムとして提案しています。やむなく国外に出なくてはならなかった人たちは、故郷に帰る時まで日本に豊かな人間関係を築き、いずれは故国と日本の橋渡し役となる人材となってくれるのではないかと感じました。

八代—アイデアがとても面白く、実現に向けてはハードルが高そうですが、大胆な仮説、チャレンジを評価したいと思います。日本が難民の受け入れに消極的であり、「積極的に受け入れる意思がない」「保護するのではなく、管理する視点が強い」と鋭くはつきり指摘している点も良いと思いました。

小松—難民という世界的に大きな問題に臨んだということと、日本としてできることはないかを考えた点を評価しました。難民の受け入れには課題も多いですが、日本を



審査委員 本田 健司

「エシカルな縫製工場」 社内審査委員のコメント

- ・ 高校生の論文とは思えないほどコンパクトに課題と解決策が整理されており、ソーシャルビジネスの肝をしっかりと勉強している。類似のソーシャル事業はあるが、その着眼点や斬新な発想をこの年齢で腑に落としているところは、未来への可能性を感じる。
- ・ ファストファッションの生産時の労働者の問題と共に、衣料の大量廃棄という社会問題もはらんでいる課題であり、世界的な視野で双方の改善につながる提案。服飾に限らず、今後このような考え方は広く考えられていかなければならないと思い、課題発見の観点でも評価した。

「SMILE FACTORY」 社内審査委員のコメント

- ・ 単なる援助としてではなく、難民、受け入れ側のコミュニティ、クラウドファンディングで投資する企業、それぞれの役割と期待できるメリットが現実的な視点で示されている。これなら実現できるかもしれないと感じるとともに、難民問題の平和的な解決方法として多く人や企業に夢や希望を与えることのできるアイデアだと思う。
- ・ 難民問題と日本の各種問題をつなぎ合わせた問題解決策の提示、そして最後にクラウドファンディングにつなげて実現可能性を高めた点を高く評価したい。まさにサステナブルな未来だと感じた。ここに、なぜ日本は難民受け入れに消極的なのかという観点を加えた上での問題解決であれば、なお良かったと思う。

第二の故郷だと思ってくれる人を増やしたいという筆者の思いに、シンパシーを感じました。

「Soap-Loop」

—問題意識をもとに大胆に切り込む勇気と行動力

池上—この論文は、審査する側も男性と女性とで評価が分かれるのではないかと思います。諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張しています。ともすればタブーとされてきた性について、国際的に考えていこうという問題意識とスケールの大きさを、高く評価したいと思いました。

桑津—ある意味デリケートな課題で、日本では必ずしも活発に取り組まれていない性の分野に大胆に切り込んでいった勇気を、評価しました。

「分解者を利用したトイレ」

—グローバルなテーマに対するユニークな発想

池上—インドのモディ首相が「インドのすべての家庭にトイレを設置する」という一大号令を掛けたぐらい、途上国にはトイレのない家が非常に多いのですが、このことが実は大問題であることをユーモアのあるタイトルで提起しています。Decomposerトイレの方式を具体的かつ合理的に発想している姿勢も、評価したいと思いました。

桑津—日本では綺麗なトイレが当たり前なために、これまであまり取り上げられて来なかった「屋外排泄」のテーマをあえて取り上げた視点が良いと思いました。また、技術的なアプローチの模索を行って図式で表現している点も加味して、高く評価しました。

本田—まず、「屋外排泄」というグローバルな問題を取り上げた点を評価しました。独自に考えたものだと思う、具体的なトイレの作り方で書いているところもユニークで、非常に興味深く読みました。

「サポいる」

—被災地のニーズに応じた災害ボランティアの活動を支援

最相—災害ボランティアに関わる提案はこれまでもありましたが、東日本大震災におけるボランティア数は震災後2年目、3年目と急激に減少した状況があり、被災地の中長期的支援に焦点を絞っている点を評価しました。今どこで何が必要か、ニーズに応じた支援が可能となるシステムで、この災害ボランティアアプリは今すぐにも実用化してほしいと思いました。高齢者介護や障がい者支援のプラットフォームとしても応用できそうです。

齊藤—震災や津波などの災害時に、ボランティアが自発的かつ効果的に動けるようなアプリを開発したいという提案には、強く共感しました。こういうものは上から計画的にやっても、志ある者たちがバラバラに動いてもうまく行かないだろうと思うので、SNS時代にはこういう民間主体的なアプリをうまく活用できればという期待を込めて、評価

「Soap-Loop」

社内審査委員のコメント

- ・実際に「カタリバ」を作り、実践してみた行動力、そこから学んで途上国支援や石けん作りと販売という具体的な活動を考え、さらに男性参加についても検討している。次々に考え、行動し、探りながら誰もが生きやすい社会を目指しているというのが、分かりやすく伝わってきた。これからの活動も応援したい。
- ・日本における性教育の現状を把握し、何故うまく行かないのかを分析して、その原因（仮説）への対応策が、飛躍せずに納得感のある内容で記載されている。解決策も、まずは改善への第一歩として捉えることができ、現実味がある。世界から見て前時代的な社会通念にどう立ち向かうかを、目をそらさずに論じている点に好感が持てた。

「分解者を利用したトイレ」

社内審査委員のコメント

- ・問題提起やその解決策について、具体的かつ根拠も明確で説得力があった。筆者の解決策が実現できれば確かにサステナブルで、安全安心な社会を実現できると感じた。
- ・しっかり問題提起から具体的な施策、その課題点まで検討されている点が良かった。WHOが課題提起している内容や問題の背景がよく調べられていたと思う。



審査委員 齊藤 義明

しました。もう少しアプリの要件を示してもらえたら、もっと評価は高くなったと思います。

八代——災害対策という視点はよくありますが、災害後にボランティアを効率よく活用するというのはなかなか良い視点で、データも上手く活用できています。自分もボランティア活動に関しては、慣れないことに中途半端に手を出すべきではないと思っているところがあるのですが、このようなものがあれば確かに一步踏み出せると思います。東日本大震災から10年経った今でも避難者が5万人いるということも再認識できました。

最終審査会のプレゼンテーションで各賞を決定

桑津——最終審査会に進める論文をどうするかについて議論したいと思います。単純に点数だけが判断基準になるわけではありませんが、点数としては「エシカルな縫製工場」が最も高く、1点差で「SMILE FACTORY」となっています。まず、「エシカルな縫製工場」は最終審査に進めても問題ないと思いますが、いかがでしょうか。

一同——賛成です。

桑津——次いで評価の高いのが「SMILE FACTORY」で、「Soap-Loop」「分解者を利用したトイレ」は同点で、次に「サボいる」になっていますが、意見がありましたらお願いします。

最相——「Soap-Loop」は池上さんが高評価をつけておられますし、最終審査に進めていいと思います。

池上——私は構いませんが、みなさんの意見はどうでしょうか。

八代——私は正直、それほど新しさを感じなかったのですが、大胆にこのテーマを取り上げたことはとても勇気があると思うので、そこは評価に値すると思っています。

最相——池上さんがその次に高評価をつけておられる「分解者を利用したトイレ」についてなのですが、この提案ではその土地の分解者を使うと書いていますが、具体的にどういう分解者が想定されるかや、既存のバイオトイレの限界や独自の視点など、もうひとひねりがあればさらに良かったなと思います。

桑津——最相さんは「SMILE FACTORY」を高評価にされていますが、そのほかで推したい論文はどれでしょうか。

最相——「サボいる」ですね。この論文がいいと思ったのは、災害後に時間の経過と共に被害の実態が明らかになっていくにつれて、被災者の心理的な格差が広がる「ハサミ状格差」があらわとなる被災地の中長期的支援に焦点をあて、ニーズに応じた支援が可能となるシステムを提案しているからです。

池上——「SMILE FACTORY」についてなのですが、これを高く評価すること自体には異論はありません。ただ、日本で難民申請が認められる数が少ないということが書

「サボいる」 社内審査委員のコメント

- ・ 自然災害とは切っても切り離せない日本に住んでいるので、復旧・復興の問題を2つに切り分け、手助けできるツールで解決しようという考えが良かった。災害の傷を笑顔にしたいと思う動機がきっかけであるところも大事。
- ・ 日本の大きな課題である災害に対して、ボランティアの需要と供給に着目した問題発見が良かった。時系列別に課題を設定している発想も鋭い。



審査委員 八代 夕紀子



特別審査員 最相 葉月さん



審査委員 小松 康弘

高校生の部

論文審査会レポート

かれていて、実際にその通りであるものの、日本での難民申請のかなり多くは経済目的で、結果的に難民として認められないので日本で稼いで帰っていくという実態があります。ですから、日本で難民申請が認められる数が少ないのはどうしてかという分析もあれば、「SMILE FACTORY」の説得力がより増したのではないかと思います。

桑津—「SMILE FACTORY」「Soap-Loop」「分解者を利用したトイレ」、それぞれにご意見はあるものの、評価することにご異論はないようですね。それでは、最相さんの推す「サボいる」も併せて、すべて最終審査に進める方向で進めたいと思いますがよろしいでしょうか。

一同—はい。

桑津—議論をまとめますと、高校生の部の最終審査対象作品は、「エシカルな縫製工場」「SMILE FACTORY」「Soap-Loop」「サボいる」「分解者を利用したトイレ」の5作品といたします。各賞は、12月20日に行われる最終審査会でのプレゼンテーションで決定します。



特別審査委員 池上 彰さん



論文審査 講評



審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

「サステナブル未来予想図」のテーマは3回目となりますが、過去2回同様、やはりサステナビリティの枠組みでは大胆な未来像は描きにくい傾向が感じられました。次回以降のテーマ設定が課題だと思っています。

また、今回の論文審査では、これまでアイデアの発想を狭めてしまうとしてあまり評価軸の上位には置いてこなかったリアリティ、実現性についての議論が、実際には審査委員からしばしば出てくるということがありました。この評価軸を今後どうするのか、検討する必要があるのではないかと感じました。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

コンテストの回を重ねるごとに、前にも読んだような“既視感”を覚えるテーマ、提案が出てくることはどうしても避けられず、今回もその傾向が感じられました。コンテストの公式サイトには過去の受賞作品も掲載されているので、傾向と対策を研究されるということもあるでしょう。今後どのような募集テーマを設定するのが、大きな課題になってきたと思います。

そのような中で、自分で一生懸命考えて論文を書き、応募してくれる学生のみなさんに、自分の考えを発表するチャンスを与えるのはとても意義のあることだと、改めて感じました。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

集まった論文には、途上国の人々、難民、高齢者、被災者、コロナ禍で経済困窮する家庭、ヤングケアラーなど、視野広く様々な人に対してやさしい心で向き合い、真摯に、ていねいに、想像力豊かに解決策を講じているものが数多く見られ、順位をつけがたい思いも持ちました。また、今の30代以下の人たちは、これから大変な時代を生きて行かなくてはならないのだということを改めて感じました。

加えて、今回、留学生の論文が非常に優秀で、かつて「留学生の部」があった頃に日本語が堪能で優秀な留学生がとても多かったことを思い出し、今後が大変楽しみだという思いを持ちました。

論文審査 講評



審査委員

齊藤 義明 未来創発センター 2030年研究室長

今回の応募論文を読んで感じたのは、今の高校生・大学生は良くも悪くも「SDGs世代だな」ということです。視野広くグローバルに物事を見る目を持っている一方で、本当の意味での“リサーチリテラシー”が弱い、つまり「なぜなのか」「本当なのか」と情報や真実を追求する力が少し足りないのではないかと感じました。メディアでSDGsと聞けば「SDGs的に正しくあらねば」と考えるのではなく、自らもう一度深く調べ尽くしてみる姿勢が大切だと思います。そのような人が育っていってくれることを期待しています。



審査委員

八代 夕紀子 プラットフォームサービス開発部 グループマネージャー

今回は「安全安心な社会」という設定のためか、斬新というよりは総じて安定的な提案が多かったと思います。作品のレベルは大学生、高校生とも全体的に高く、コロナ禍で推敲の時間がしっかりとれたためなのか、例年より文章力も上がっていた印象です。

特に留学生の論文は非常にレベルが高く、留学生とは気づかないほどの日本語の文章力で優秀な作品があり、驚きました。評価したい論文のレベルが拮抗していて順位をつけるのに悩みましたが、とても楽しく審査させていただきました。



審査委員

小松 康弘 コーポレートコミュニケーション部長

審査に携わるのは3回目ですが、今回は前にも似たような論文を読んだという“既視感”を覚える作品がかなり多くありました。3回目となる「サステナブル未来予想図」のテーマは、シリーズ的な発想で設定した経緯があり、来年はテーマ設定を刷新したいと思います。

また、論文を評価する際に、私が提案に求めるのは“実効性”であると再認識するとともに、高校生、大学生に提案の実効性をどの程度具体的にイメージできるかと考えると、あまり期待値を上げ過ぎてもいけないのではないかと感じました。



審査委員

本田 健司 サステナビリティ推進室長

これまでのコンテストで歴代2番目に多い3,043もの作品を応募して頂き、また、コロナ禍で留学生の数が減っているにもかかわらず、留学生からも昨年と同じ数の応募を頂けたことを大変嬉しく思うとともに、ここに深く御礼申し上げます。

審査に携わって6回目になりますが、高校生の作品にここまでグローバルなテーマが多く見られたのは初めてだと思います。今の高校生がグローバルな視点で問題を提起し、日本の政治にも関心を持っていることに「日本の将来に期待が持てるな」と、頼もしく感じました。

NRI学生小論文コンテスト2021

最終審査会



最終審査会

地球のサステナブルな未来のために
それぞれの思い描く「安全安心な社会のカタチ」をプレゼン



2021年12月20日、「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会が行われました。前回は新型コロナウイルス感染予防のためオンライン開催でしたが、今回はNRI東京本社の大会議室とオンラインをつないだハイブリッド開催となりました。論文審査を通過した9作品（大学生の部4、高校生の部5）の執筆者がプレゼンテーション審査に臨み、厳正な審査を経て、受賞論文を決定しました（決定した各賞はP.73～76参照）。

審査の開始にあたって、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が挨拶。「この最終審査に残っているのは、約3,000もの応募作品の中から選ばれた9つの論文です。どれも甲乙つけがたい素晴らしい作品ばかりで、それを書いた方々に直接お話をうかがえるのを大変楽しみにしています。それぞれの作品にかけるみなさんの想いをストレートに、できるだけリラックスして話していただきたいと思います」と激励しました。



〔最終審査会 審査委員〕

審査委員長

桑津 浩太郎 NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

梅野 修 共同通信社 客員論説委員

審査委員

此本 臣吾

安斎 豪格

松原 猛

齊藤 義明

八代 夕紀子

NRI代表取締役会長兼社長

NRI代表取締役専務執行役員

NRI執行役員

NRI未来創発センター 2030年研究室長

NRIプラットフォームサービス開発部 グループマネージャー

最終審査会レポート

2021年12月20日に行われた「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会における「プレゼンテーション審査」の様子をレポートします。

*プレゼンテーションは6分+質疑応答4分で、氏名の五十音順に行いました。

高校生の部

自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ

生方 智絵 うぶかた ちえ

プレゼン動画はこちら https://www.youtube.com/watch?v=T9QTbwM_GTw



自然災害が後を絶たない日本で、被災地への円滑で持続的な復旧・復興支援を行うために、災害ボランティア支援アプリ「サボいる」(被災地をサポートし、皆をすまいるに)を提案。「今後大きな自然災害が起きたとしても、安心安全で住み続けられる社会、そして自然災害から笑顔を守る手助けになる」と訴えました。文献データや図解を効果的に使いながら、災害ボランティアの現状課題やアプリの具体的な機能をテンポ良くプレゼンし、「サボいる」の必要性を印象づけました。

審査委員との質疑応答

Q—これはいわゆるマッチングアプリだと思いますが、ボランティアに行って困ったなど、このアイデアのきっかけとなったようなご自身の体験はあるのでしょうか。

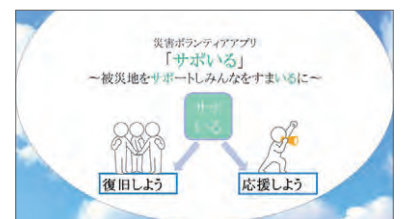
A—ボランティア活動に興味があって、調べるうちに思いついたアイデアです。アイデアの直接のきっかけとなったのはウーバーイーツで、近隣の人からの注文に応えるマッチングアプリのようなものができたらと考えました。

Q—中心として機能する災害ボランティアセンターには、どういう人が関わる事を想定していますか。行政なのか、それともボランティアの中から選ぶのでしょうか。

A—行政ではなく、ボランティア活動の経験豊かな人を募集して、その中から選びます。すでにNPO法人などで災害ボランティアを組織して活動している人たちがいるので、そのような民間の災害ボランティアに精通した人たちと協力したいと思います。

Q—災害が起こった時に、情報を共有化して最適な体制を作る上でデジタルは大きな役割を果たすと思うのですが、一方で、正しい情報が発信されなければ混乱に拍車がかかることも予想されます。情報の確からしさはどうしたら守れると思いますか。

A—「サボいる」の利用者には、主催団体である災害ボランティアセンターからの発信だけが行くようにするなどの対策を考えています。



日本を第二の故郷に ～未来の人材にクラウドファンディング～

篠原 瑞希 しのはら みずき

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=m2jkcuPJSZs>



世界に故郷を追われた難民が8千万人以上いるという問題に対し、難民を未来の人材と見込んで企業から投資してもらって運営する難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。「日本の文化と人々の心に触れ、笑顔を取り戻し、難民でなく未来の宝と呼ばれてほしい」と訴えました。

落ち着いた語り口で、地域活性化や地元企業の人材獲得などのメリットを説明。日本としてできることを考える真摯な姿勢が、プレゼン全体から伝わりました。



審査委員との質疑応答

Q — 難民の人たちの人材育成も含めて企業に資金を募るということですが、具体的な方法としてどういったことを考えていますか。

A — まず、政府からクラウドファンディング参加企業に対して「国際的社会貢献企業」という価値をつけてもらうことを考えています。そのネームバリューによって企業の信頼性が高まり、イメージアップにもつながると思います。

Q — 地方にSMILE FACTORYを設立する場合、難民の子どもたちの教育面についてどのようなサポートが考えられますか。

A — 地方の小学校や幼稚園、公民館などと連携をとり、できるだけ日本の子どもたちと多く触れ合って日本ならではの文化や遊びを通してまずは環境に慣れてもらい、勉強については小学校などをうまく利用していくことを考えています。

Q — 日本に行くことを希望する難民全員を受け入れることはできないと思いますが、そこに対する工夫などはありますか。

A — 段階的に人数を増やしていくことを考えていて、初年度は1,000人、以降は500人、1,000人単位で増やせればと思います。ドイツやアメリカと同程度の受け入れを目標に、まずは現実的には1,000人という数字がふさわしいかなと思いました。



世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」—SRHRの実現へ—

原 まりこ はら まりこ

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=ThrIhMpdKvI>



若者が集まって性についてオープンに話せる場を作り、そこで作ったオリーブ石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の医療を支えるNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案。「誰もが生きやすい社会にするためには、性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だ」と主張しました。審査委員に語りかけるように落ち着いてプレゼンし、SRHRの向上に取り組む必要性や「一人ひとりの意識の変化が社会の変化につながる」という言葉の納得感を高めました。

※SRHR：Sexual and Reproductive Health and Rights(性と生殖に関する健康と権利)



審査委員との質疑応答

Q —このプロジェクトに参加する人たちをどのように集めるかが大きな課題だと思うのですが、今の時点で何か考えはありますか。

A —女子校は共学校よりも性に関する話題を出しやすい雰囲気があるので、例えば共学ではない学校から参加者を集めるのも一つの方法だと思います。

Q —この活動はどうやって男性を巻き込んでいくかということが一番のポイントになると思います。何かアイデアがあれば教えてください。

A —このプロジェクトの特徴として、途上国の人や貧困家庭などさまざまな立場の人とつながることができることが挙げられます。例えば途上国の支援をしたいということが最初のきっかけとなって、男性が参加することもあればいいなと考えています。

Q —性教育は学校教育で行ったほうが良いという意見もあると思うのですが、あえて自発的な立ち上げでやろうと考えた課題意識について聞かせていただけますか。

A —日本の性教育の遅れについて調べる中で、例えば性教育に意欲的な先生に対して教育委員会などから反対の動きがあって続けられなかった事例もあることを知りました。教育が変わることももちろん必要ですが、各個人の意識が変わらなければ社会は変わらないのではないかと考え、個人の方面からアプローチすることにしました。



～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～ 縫製工房 Clothes Mom

平松 明華 ひらまつ はるか

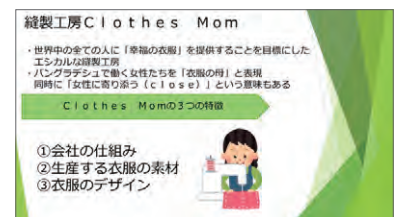
プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=9-W8wbjpH34>



縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩落事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指し、エシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。「衣服を作る人も着る人も、最善な選択をすることが必要だ」と訴えました。

練りこまれた会社の仕組みや生産する衣服の素材・デザインへの丁寧な説明から、「世界にエシカルファッションを普及させたい」という熱意が伝わりました。

※エシカルファッション：人間や地球環境などのさまざまな視点から最善の選択をするという考え方に即したファッション



審査委員との質疑応答

Q —バングラデシュ以外にも同じような状況の国はある中で、なぜバングラデシュに Clothes Momを作るのか、他の国に広げる考えはないのか、教えてください。

A —衣服の生産率は中国に次いで高く、世界の最貧国でもあるバングラデシュが、先進国の人々の衣服を大量生産している現実に矛盾を感じ、バングラデシュに視点を絞りました。いずれ先進国、日本にも Clothes Momの工場を建設していきたいです。

Q — Clothes Momの衣服を日本で売する場合、価格が高くなるのではないかと思います、その辺はどう考えていますか。

A —フェアトレードで公正に取引された衣服を高く感じるのは、ファストファッションの価格が安いからだと思います。エシカルファッションを普及させていくことによって、Clothes Momの商品価格が当たり前である社会になるのが理想です。

Q —会社の仕組みなどが詳しく考えられています、構想にはどの位の時間をかけましたか。また、ご自身は将来何になりたいと思っているか教えてください。

A —情報収集を含めて3カ月位かかりました。将来は雑誌の編集者などになって、おしゃれで人気があり、公正に取引され、環境にも良いエシカルファッションを多くの人に発信していくことが目標です。



人間、う○ちくれるってよ by 分解者

深尾 優子 ふかお ゆうこ

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=Kw9MBOxBKB8>



人権・健康・環境の問題につながる「屋外排泄」に対して、設置場所付近で採れた分解者を排泄物処理に利用した「Decomposer Toilet」を提案。従来型トイレとの違いを「外部から導入するのではなく、その場で生み出すこと」と強調し、「全ての人にトイレで排泄する権利があり、それを実現する一助になる」と訴えました。分解者の機能を実験して実現性を掘り下げる姿勢や、「屋外排泄の廃絶に強い想いを持っています」と言い切る力強さに、実現への期待感が高まりました。

※分解者：生態学用語で、生物の排出物や死がいなどの有機物を分解する細菌、菌類などをさす。



審査委員との質疑応答

Q —トイレの問題について取り上げようと思ったのはどうしてですか。

A —学校で何度かSDGsについてプレゼンをする機会があったのですが、SDGsの目標のうち水に関するものを取り上げたことがなかったので、取り上げたいと思いました。また、途上国などでは今でも私と同年代の女の子たちがトイレを使えず屋外排泄を余儀なくされていることを本で知って衝撃を受け、それなら自分が今までのトイレの課題点を改善できるような、今までとは違うトイレを目指そうと思いました。

Q —リゾート地などで、下水がなくて排泄物を微生物で分解し、浸透膜を通じて土の中にしみ出させて処理しているところがありますが、メンテナンスが必要でコストもかかります。深尾さんの論文を読んで「こんなにシンプルなもの技術的に可能なのか」と驚いたのですが、これはすでに実用化されている技術なのですか。

A —まだ実用化されていませんし、実用可能かどうか分かりません。なぜ分解者を用いたかという、横山光輝さんの漫画の司馬遷の『史記』で古代中国の豚トイレというものを見て、「古代の人は、今のトイレの水の役割を豚でやっていたのか。古代に動物を使ってこんなシステムができていたなら、今でも微生物を使ってトイレの機能ができるはずだ」と考えたからです。



留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり

尹 思源 いん しげん

金 秀玟 きむ すみん（共著）

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=Xuy4PeNluAQ>



老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みを提案。「地域を持続可能な形で活性化し、各地域に合わせた取り組みをうまく推進していく必要がある」と主張しました。

流暢な日本語で龍神村や老舗旅館の課題、改善策による期待効果を掘り下げるプレゼンには、リアリティと説得力、留学生ならではの視点が感じられました。

審査委員との質疑応答

Q — 従業員の労働生産性を高めるために、顧客からのフィードバックをもらうというアイデアがありましたが、旅館の従業員にはお客さんと接触しない裏方の人たちもいます。そういう人たちへのフィードバックはどうするのでしょうか。

A — 龍神村では昼食や夕食に食べ放題という形で食事を出していますが、調理スタッフなどは直接お客様からフィードバックはもらえません。そういうスタッフはわざわざ龍神村に来てくれたお客様の立場に立って料理を考えたり、「自分が観光客ならどんなサービスをしてもらいたいかな」と考えることが重要だと思います。

Q — インターンシップで老舗旅館で働いたご経験から、また、留学生としての目線から、日本の旅館の問題点や改善点など気づいた点があったら教えてください。

A — 日本には特有のおもてなしがあり、それがマニュアル化されていることが多いのですが、マニュアルにない状況が発生すると、その状況を解決するためにとても時間がかかることを経験しました。例えば、お客様が「こういうことをしたい」と言っても、直接対応しているスタッフは「上の者に聞きますので」と、その場で決められずにお客様を待たせてしまいます。お客様と接するスタッフも、ある程度決める力を持ち、自分で考えて行動できるようにしたほうが良いと思います。



新しい教育の形を世界へ

上原 綾乃 うえはら あやの

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=YWh1e4rvmul>



南アジアの学生が、オンラインで日本の小中高生に宗教、自国の慣習や文化、国際政治、歴史について英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教員になる「International Teacher 制度」を提案。「異文化理解を深める教育を通して、差別がなくなり、本当の意味での共生が実現することを期待したい」と訴えました。南アジアの教育課題を掘り下げ、具体的な取り組み内容を丁寧に説明するプレゼンから、「教育の新たな可能性をひらきたい」という強い想いが伝わりました。



審査委員との質疑応答

Q —ご自身も教育に取り組んでいこうと教員を志望されているのですか。また、この制度を南アジアに限定した理由を教えてください。

A —教職とともに、開発途上国支援の観点から制度を整える仕事にも関心があります。南アジアに限定した理由は、日本との時差が少ない地域であるために、コロナ禍で減少した国際交流や合同授業の機会をオンラインで実現できるからです。

Q —学校建設の不正や学校施設の私的流用、無断欠勤が多いなど、かなり具体的に南アジアの教育現場の問題を挙げていますが、こういったディテールが書けた根拠を教えてください。

A —これは他の論文からの引用がもとになっています。ぜひその現状を自分の目で確認したいと思い、アジアを一周する計画を立てています。

Q —南アジアの政府はIT 機器の寄付を歓迎するとは思いますが、教育分野に外資系企業が参入するにはさまざまな規制を乗り越える必要があると思います。制度の導入について現地政府の同意を得て、規制をクリアできると思いますか。

A —日本のIT企業の認知を高めた上で、現地政府に申請を受理してもらい、南アジアの教育現場に導入してもらえたらと思っています。



セルフサービスフードバンク ～新しい食品リサイクルのかたち～

張 穎慧 ちょう えいけい

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=vDjSMhXXwiM>



コンビニでのアルバイトで感じた、毎日大量に廃棄される食品への「もったいない」という思いから、廃棄される食品を必要とする人に提供する仕組みとして自動販売機のように街角に設置する「セルフサービスフードバンク」を提案。「セルフサービスフードバンクで、食べ物を大切に作る輝く未来を迎えよう」と訴えました。流暢で的確な日本語によって国内フードバンクの課題や普及効果などを説明。実体験に根差した提案への思いや、留学生としての独自の視点が伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q——セルフサービスフードバンクに、誰が何をを入れるか分からないというリスクに対してのセキュリティは、どう考えていますか。また、機械の中で賞味期限が切れてしまうことも考えられますが、どのように管理し、処理するのでしょうか。

A——安全性を確保するためには、AI技術の活用が必要だと思います。今後さらにAI技術が発展したら、変性した食品を見つけて分類したり、クラウドで食品情報を遠隔管理することもできるのではないかと思います。賞味期限が切れた場合は、自動的に撤去して機械内に保存し、ロボットを設置して地域ごとにそういった食品を回収して、動物のエサにするなどの活用方法もあると考えています。

Q——コンビニの食品であればパッケージがしっかりしているので取り扱いやすいと思いますが、一般家庭から食品を出す場合、例えば容器を統一するとか、冷凍するなどが必要ではないかと思うのですが、何かお考えはありますか。

A——野菜や果物などはパッケージするときに傷が付く可能性もあるので、扱うのは難しいと思っています。セルフサービスフードバンクでは、家庭で余っている未開封のお菓子や米、調味料など、品質管理しやすいものを主に扱い、必要な人に提供したいと考えています。



ひよっこドクターのほけんしつ

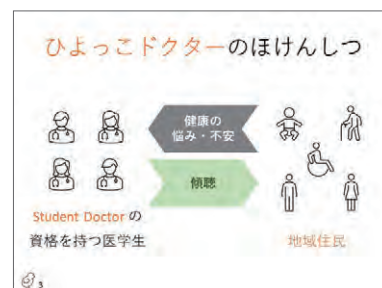
中島 寛音 なかじま ひろね

プレゼン動画はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=afuZxoycdaQ>



地域医療における医師不足の問題に対し、Student Doctorの資格を持つ医学生による地域住民の健康相談の場、「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。「安心安全でサステナブルな社会のために、誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できるようになることが目標。本提案はその実現手段の一つである」と訴えました。

落ち着いた語り口で日本の医療の課題解決の方向性を説明するとともに、「継続的に医師を確保できる効果が期待できる」と強調し、実現への期待感を高めました。



審査委員との質疑応答

Q — Student Doctorは国家試験も控えており、時間的な余裕があるのが気になります。また、普段は大学にいるStudent Doctorがどうやって地域の人と交流するのか、教えてください。

A — 勉強はありますが、アルバイトやサークル活動などをしている人も多いので、時間は作ればあると思います。また、新潟で新潟市以外の市町村で「ひよっこドクターのほけんしつ」を行う場合は現地に行く必要がありますが、新潟市から離れた地域の病院での地域実習の週末などを利用し、地域の人と交流できたらと考えています。

Q — 「ひよっこドクターのほけんしつ」を実施するにあたって、厚生労働省の規制の問題は特に気にしなくてもよいのですか。

A — 規制については詳しくないのですが、今、新潟大学の先生方と協力しながら、実現方法を模索中です。その中で何か問題が生じたら、クリアしていきたいと思います。

Q — 地域の中に医師が少ないとは言え、地域で実際に頑張っている地元の医師がいると思います。地域の医師会との関係性についてはどう考えていますか。

A — 地域の医師会との連携は最も重要だと思っています。指導医になっていただけるよう地元の医師会にお願いし、連携できればと考えています。



最終審査結果および評価のポイント

「サステナブル未来予想図～こんな地球で暮らしたい・安全安心な社会のカタチ～」をテーマとして開催された「NRI学生小論文コンテスト2021」は、大学生の部4作品、高校生の部5作品、計9作品が最終審査会に進みました。

2021年12月20日の最終審査会で筆者によるプレゼンテーションを実施し、厳正な審査を行った結果、以下のとおり受賞論文を決定しました。

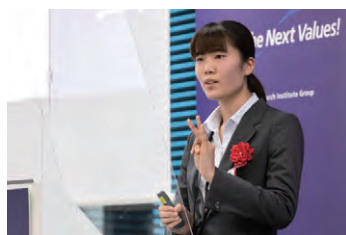
大学生の部

大賞

ひよっこドクターのほけんしつ

～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～

中島 寛音



評価のポイント

地域医療におけるかかりつけ医の不在、医学生が全人的に患者を診る視点の欠如、独居や老老介護による高齢者の孤独などの課題意識から、「誰でも気軽に医療を受けられ、体調のことを相談できる」安全安心な社会を目指し、全国共用試験に合格したStudent Doctorの資格を持つ医学生による「ひよっこドクターのほけんしつ」を提案。

医師に必要な複眼的レンズを身につけるための試みが地域を支え、ひいては日本の医療全体の底上げにもつながる、全国的なスタンダードとなりうる実現可能性のある仕組みであり、審査委員の高い評価を集めた。内容、構成、表現など、論文としての完成度も高い。

優秀賞

新しい教育の形を世界へ

上原 綾乃



評価のポイント

南アジアの教員志望の学生が、オンラインで日本の小中高生に自国の文化、歴史、宗教、政治などについて英語で授業を行い、その経験を活かして自国の学校で教師になる「International Teacher 制度」を提案。

理想とする、すべての人がどこにいても笑顔でいられる多様性社会の実現のために、「人」への理解を深める必要があるという思いと、教師不足や教育の質が低いといった途上国の教育課題を掛け合わせた視点に独自性を感じる。国境を越えて双方にメリットのある、具体的な取組みが提示されている点も評価した。コロナ禍でオンラインコミュニケーションが実効的になったことも、本提案の実現性を強めている。

最終審査結果および評価のポイント

大学生の部

特別審査委員賞

セルフサービスフードバンク ～新しい食品リサイクルのかたち～

張 穎慧



評価のポイント

まだ食べられるのに廃棄される食品への「もったいない」という思いを出発点に、廃棄されてしまう食品をリサイクルして食べ物に困っている人たちを支援する「セルフサービスフードバンク」を提案。

コンビニでのアルバイトや米国の本格的なフードバンクでのボランティアなど、実体験を通じて得た現場での気づきを、自動販売機のように街角に設置するという新しい食品リサイクルの提案につなげている点を評価した。国内のフードバンクの普及を妨げている諸問題もよく分析している。誰でも食品を寄付して支援者になれるアイデアで、設置場所の工夫などで安全性への配慮を強化すれば実現性もあるだろう。

留学生特別賞

留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案 及び観光まちづくり

尹 思源
金 秀玟（共著）



評価のポイント

老舗旅館でのインターンシップの経験を通して感じた、繁忙期と閑散期の差、運営側の労働生産性の低さという課題に対して、紀南体験巡りツアーと従業員の労働生産性を向上させる仕組みづくりを提案。

地方の優良な観光資源をいかに活性化させるかというテーマ設定と課題解決の流れが明瞭で、留学生とは思えない文章力と論文としての完成度が際立っている。分かりやすい論展開で、地に足のついたリアリティと説得力がある。具体的なツアースケジュールも興味深い。コロナ禍で弱った観光業界を留学生が活性化しようとする提案で、これからのインバウンドを考える上でも注目に値する。

最終審査結果および評価のポイント

高校生の部

大賞

～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～
縫製工房 Clothes Mom

平松 明華



評価のポイント

縫製工場の劣悪な労働環境が明らかとなったバングラデシュのビル崩壊事故を受けて、衣服の生産に関わる人々が誰も犠牲にならない未来を目指して、バングラデシュの女性たちによるエシカルな縫製工房「Clothes Mom」の設立を提案。

現代奴隷というグローバルな問題を取り上げ、具体的な解決策を提示している。働き方や保育園の整備、エネルギー確保まで目配りし、自ら起業家のごとく主体的に会社や事業の方向性をデザインする、攻めの姿勢や熱意を高く評価した。エシカルファッションを世界標準にしてClothes Momの衣服を流通させたいという志に、実現への期待感を強く抱かせられた。

優秀賞

日本を第二の故郷に
～未来の人材にクラウドファンディング～

篠原 瑞希



評価のポイント

大切な故郷を捨てて難民となる人が世界に8千万人以上いるという現状に対して、日本としてできることはないかを考え、難民を未来の人材として見込んで企業からの投資してもらうことで成り立つ難民受け入れ施設「SMILE FACTORY」の設立を提案。

難民という日本では扱いにくい世界的な問題にチャレンジし、「管理」ではなく「共に生きる」という視点から、すべての関係者にwin-winとなる仕組みを大胆に考案している点を評価した。やむなく祖国を離れなくてはならなかった難民にとって、SMILE FACTORYは一つの希望になると思われる。

最終審査結果および評価のポイント

高校生の部

優秀賞

世界の女性をつなぐ「Soap-Loopプロジェクト」 —SRHRの実現へ—

原 まりこ



評価のポイント

諸外国から後れをとる日本の性教育の現状を踏まえ、誰もが生きやすい社会にするためには性の話題をタブーとする社会の意識を変えることが必要だと主張。若者が集まって性について自由に話せる場を作り、そこで作った石けんを貧困家庭に安価で販売し、売り上げを途上国の女性の健康を守るNGOに寄付する「Soap-Loopプロジェクト」を提案している。

日本では活発に取り組まれていない性の分野に大胆に切り込んだ勇気、実際にカタリバを作り実践した行動力、国際的に考えていこうという問題意識とスケールの大きさを評価した。LGBTQや男性参加という課題を検討している点も良い。

特別審査委員賞

人間、う○ちくれるってよ by 分解者

深尾 優子



評価のポイント

世界で6億7300万人がトイレのない生活を送っている「屋外排泄」の問題に対して、分解者を糞尿処理に利用した、水も電力も不要な「Decomposer Toilet」を提案。

衛生問題、環境汚染、人権問題にもつながり、SDGsの課題の一つにも掲げられるこの問題に着眼した点に、まず独自性がある。ユーモアのあるタイトルで提起しながら、Decomposer Toiletの方式を具体的かつ合理的に考案しようという姿勢、技術的なアプローチの模索を評価した。設置地域の生態系を壊さない分解者を使い、分解者が生息しない地域のために人工分解者の開発まで考察している点も良い。

特別審査委員賞

自然災害から笑顔を守る復旧・復興の新しいカタチ

生方 智絵



評価のポイント

自然災害が後を絶たない日本において、次の世代へと住み続けられる街をつくるためには、被災地の円滑で持続的な復旧・復興支援が不可欠だということから、災害ボランティア支援アプリ「サポいる」(被災地をサポートし、皆をすまいるに)を提案。

文献データを上手に活用し、被災地の中長期的支援に焦点を絞り、災害後ボランティアの効率的な活用や普及に着眼した点が優れている。今ここで、どんな支援が必要か、ニーズに応じた支援が可能となるようシステムの具体的内容もよくイメージされており、説得力がある。実用化への期待感を強く抱かせる提案である。

最終審査を終えて



審査委員長

桑津 浩太郎 NRI 研究理事

プレゼンテーションでは、非常にユニークなものや実際の活動に基づくもの、質疑応答への当意即妙な受け答えなど、評価したい点が多くありました。そのため、最終審査においては点数が拮抗し、例年になく順位づけが困難な状況であったということが言えると思います。

また、高校生の部、大学生の部とも受賞者はすべて女性でしたが、これも厳正な審査の結果だと思っています。

受賞された高校生、大学生のみなさん、おめでとうございます。このたびはコンテストにご参加いただきまして、ありがとうございました。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

最終審査の前に論文審査を行っていますが、名前も学校も性別も全て伏せられた上で最終審査に進む論文を選定しています。結果的に最終審査に進んだのは女性ばかりでしたが、みなさんは本当に実力で勝ち抜いてきたと言えます。

その上で、本日のプレゼンテーションはどなたも大変見事でした。緊張のために早口になってしまった人もいましたが、プレゼンテーションというのは経験を積んでいくと次第に上手になってくるものなので、さらに研鑽を積んでいただきたいと思います。

このたびは、本当におめでとうございます。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

非常にレベルの高い論文とプレゼンテーションを拝見して、私自身もとても勉強になりました。総じて非常に実直で、しかも優しい視点で書かれた論文が多く、「この地球を守ってくれる人たちが着実に育っているな、未来は安心だな」と思いました。

最終審査まで残らなかった作品の中にも、ヤングケアラーやSNSでのいじめの問題などジャーナリズムでニュースになっているテーマを取り上げたものがあり、みなさんが広い視野で社会の課題を捉えていると感じました。

受賞されたみなさん、誠におめでとうございます。

表彰式

2021年12月20日、「NRI学生小論文コンテスト2021」の最終審査会において、表彰式が行われました。

表彰式では、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が、10名の受賞者（大学生の部5名、高校生の部5名）に表彰状と副賞を授与し、会場のNRI東京本社大会議室に大きな拍手が響きました。

会場やオンライン上で晴れやかな笑顔を見せてくれた受賞者のみなさん、本当におめでとうございました！



受賞者一人ひとりに向け表彰状を読み上げるNRI代表取締役会長兼社長の此本 臣吾



大学生の部 大賞受賞の中島 寛音さん



大学生の部 留学生特別賞受賞の金 秀玟さん（左）と尹 思源さん



高校生の部 大賞受賞の平松 明華さん



閉会挨拶をするNRI代表取締役専務執行役員の安斎 豪格



閉会後、最相・池上両特別審査委員としはしの歓談



大学生の部5名、高校生の部5名の受賞者のみなさん、おめでとうございます

受賞者の言葉

大学生の部 大賞

ひよっこドクターのほけんしつ ～Student Doctorたちによる地域住民の健康相談の場～

中島 寛音 さん 新潟大学 医学部3年



本日はこのようなプレゼンテーションの機会を設けてくださり、本当にありがとうございます。

応募した時には、まさか賞をいただけるとは思っていませんでしたが、医学生として自分がこうあってほしいと思うことを論文に書いて、その結果賞を頂けたのかなと受け止めています。また、自分の論文をとてども丁寧にこんなにたくさんの審査員の方が読んでくださり、コメントをくださったことで、本当に貴重な経験をさせていただいたと思っています。

それから、司会の山岡さんが、はじめに発表者に「みなさん、大丈夫ですか?」と声をかけてくださったのですが、そこで私は本当は「大丈夫じゃないです!」と言いたかったのですが、(緊張をグッとこらえて)なんとか「大丈夫です」と言いました……今日一日を無事に終えることができて良かったです。ありがとうございました。



司会のNRI 山岡 依子

大学生の部 留学生特別賞

留学生から見る老舗旅館に対する改善策の提案及び観光まちづくり

尹 思源さん 高崎経済大学 地域政策学部3年

金 秀玟さん 高崎経済大学 地域政策学部3年 (共著)

尹さん—本日はこのような大変名誉ある賞をいただき、本当にありがとうございます。関係者のみなさまに心より感謝いたします。

私たちは今回のインターンシップを通して、教科書から教えられた日本ではなく、実際の日本を味わうことができました。日本特有のおもてなしを提供する立場に立ちながら、今ある課題と解決策を考えました。インターンシップ先で旅館の方々が温かく接して下さり、また旅館の担当者に和歌山県の熊野古道や白浜など有名な観光地へ連れて行ってもらったことにより、和歌山県への愛着が増しました。和歌山県でより良いまちづくりができるように、また、和歌山県だけではなく、日本の地方の観光地にも貢献したいと思っています。

金さん—素人の考えばかりで、論文を書いた段階では可能性だけで必ずしも確実な効果を期待できるとは言いがたいのが事実です。しかし重要なことは、より良い社会を作るために自分ができること、頭の中にあることを実際の行動に移すことではないかと思っています。そのために、私たちが大学で学んだことやインターンシップで経験したことを生かして、小さな力であっても役に立ちたいと思いました。

今回、こうして賞を頂けたのも、そのような私たちの気持ちが伝わったからではないかと思います。今後も一層活躍できるように頑張りたいと思います。本日は誠にありがとうございました。



左：金 秀玟さん
右：尹 思源さん

受賞者の言葉

高校生の部 大賞

～バングラデシュから始まるエシカルファッションの時代～ 縫製工房 Clothes Mom

平松 明華 さん 北海道 函館白百合学園高等学校2年



最初にこのコンテストに応募しようと思ったきっかけは、学校で配布していた『ハイス쿨タイムズ』という高校生向けの新聞でコンテストの広告を見て、自分が興味を持っている“持続可能性”という言葉にひかれたからです。入賞できるとは思っていませんでしたので、最終審査会のために東京に行くことが決まった時は大泣きました。本当に東京まで来ることができて、こうして大賞を頂けたこともまだ全然実感がなくて、今でも驚いています。

でも、夏休み中に自分で考えたり調べたりして、学校の先生方や友達に励まされながら最後まで論文を書き切って、プレゼンテーション資料も完成させることができて、本当に頑張って良かったなと心から思っています。本日お集りくださった審査員のみなさん、そして自分の家族にもお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。





株式会社 野村総合研究所

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ